

目次

田上時子のエッセイ 宮崎勤判決が積み残した課題……………	1
特集 座談会 おとなに伝えたいCAP……………	2～3
活動報告 スター・ペアレンティング事業/まつばら学校エンパワメント事業……………	4
CAP ワークショップ報告……………	5
エルコラム③ 「学習・交流事業」……………	5
リレーエッセイ 岡本祥子/栃尾妙佳……………	6
講座インフォメーション……………	7
会員の紹介・入会のおさそい……………	8
編集後記……………	8

田上時子のエッセイ

宮崎勤判決が積み残した課題
 —秋葉原事件に思う—

東京埼玉幼女連続殺人事件の宮崎勤死刑囚の死刑が 6 月 17 日、東京拘置所で執行された、というニュースを聞いて二つのことが頭をよぎった。一つは「なぜ、今?」。もう一点は「この 20 年間は一体何だったのか?」ということだ。

死刑が確定してから執行まで通常なら約 8 年かける。理由は死刑囚が「死刑」を精神的に受け入れ、被害者に対する謝罪の気持ちを真意あるものにするまでに約 3 年半かかると考えられるからだ。

宮崎死刑囚の場合、最高裁で死刑判決が確定したのは 2006 年 1 月であり、確定から執行まで 2 年余り。あまりにも早い執行に、またいつものように、大きな事件のあとには「死刑執行」という「見せしめ」的な発想からかと、怒りを通り越してあきれてしまう。

6 月 7 日(日) 歩行者天国を襲った秋葉原無差別殺人事件からちょうど 10 日目であった。

死刑執行が凶悪事件の抑止力になっていないことは、類似の事件が日常化しているのを見ても明らかである。

1989 年 12 月、国連は「死刑廃止条約」を採択し、国際社会は死刑廃止に進んでいる。先進国で今も死刑を存続させる国は日本とアメリカの一部の州だけである。

わたしは 1988 年 9 月にカナダから日本に帰国した。

事件は 11 月から翌年にかけて起こった。4 人の女の子たちを強姦・殺害し、一部骨を親に送りつけ、今田勇子という女性の名前で犯行声明分をメディアに送りつけるという当時の社会を震撼させた事件であった。

3 歳の娘を持つ親として他人事ではなく、『わたしのからだだよ!』という本を出した。子どもへの性的虐待防止の日本で初めての本である。この事件がなかったら、今のわたしの活動はなかっただろう。

事件の背景としていくつものキーワードが飛び交った。DV、子ども虐待、児童ポルノ、ビデオテープ、オタク、妄想と現実、人格障害、犯行声明文、孤立、ディス・コミュニケーションなど等。事件から 20 年。何も解明されないまま、死刑は執行されてしまった。

当時、4～7 歳だった女の子たちが今生きていたら、人生一番華やかである 20 代だ。彼女らの命は二度と再び戻らない。大切な 4 人の命と引き換えに、わたし達はこの事件から何を学び、何を考え、何を実践しなければならぬのか。どうすれば日常化している類似の事件を防ぐことができるのかを改めて検証する必要があると思っている。